



さとのかぜ

No.194号

千葉県いすみ環境と文化のさと

2016年1月5日発行

編集・発行 千葉県いすみ環境と文化のさとセンター

指定管理者 (一財) 千葉県環境財団

〒298-0111 千葉県いすみ市万木 2050 番地

TEL 0470-86-5251 FAX 0470-86-5252

URL <http://www.isumi-sato.com/>

謹
賀
新
年



2016

明けましておめでとうございます。

わたくしは昨年末に、哺乳類のはく製の中に新しく仲間入りしたアナグマです。秋には九州でクマが出たと話題になりましたが、わたくしの見間違えだったようです。二年前に、センター近くの林道で昼間散歩しているところをセンター職員に見つかり、初めて撮影されてしまいました。わたくしは雑木林の林縁部、笹やぶに被われた土手、木の根元などに長いトンネル状の巣穴を掘って家族で暮らしています。雑食性で何でも食べます。最近暮らしやすい場所が減っています。「同じ穴のムジナ」とタヌキと混同されますが、西洋では家庭と平和を愛するシンボルです。

本年も「千葉県いすみ環境と文化のさと」をよろしく願い申し上げます。

目次 1・あけましておめでとうございます 2・センターの畑 3~4・夷隅の信仰・風俗・祭・伝統など⑨ 5・農機具今昔物語⑩
6~7・いすみのコウトリ 8・南房総の「食」について③ 9~11・行事報告 11・行事案内 12・センターの生き物たち

センターの畑～ラッカセイの話～

センターの畑では5月～10月にかけてラッカセイの栽培体験を行いました。

ラッカセイは千葉県が全国一の生産量であり、落花生、南京豆、ピーナッツなどと呼ばれ親しまれています。その半面、ラッカセイの実のつけ方を知らない人も意外と多いのでは？ 本号では、そんなラッカセイのお話です。

●ラッカセイの主な成分と働き

ラッカセイは、カリウム、マグネシウム、リン、鉄などのミネラルをバランスよく豊富に含んでいます。さらに、オレイン酸、リノールが豊富でコレステロールを抑制する作用があり、肥満防止に役立つとされています。また、抗酸化ビタミンEが沢山含まれ、動脈硬化や心筋梗塞の予防、血行を良くする働きもあると考えられています。その他、ナイアシンの含有量が多く、アルコールや二日酔いを起こす成分の分解を助ける働きもあるといわれています。

●センターのラッカセイ

ラッカセイの栽培体験は、定員8家族のところ、突然のキャンセルが1家族あり、7家族で実施しました。

種は、去年センターで栽培した、千葉半立から採種した種を用いました。千葉半立は、昭和28年に千葉県で育成した品種で、枝の伸び方が伏性でなく半立性のため作業がしやすく、食味も良いことから、全国的に普及している品種です。

栽培は収量、品質を高めるマルチ栽培とし、5月10日に畝立て及び種まきを行いました。

種まきから収穫まで1家族1畝を担当することとし、幅0.75m、長さ7.5mの畝を立て、表面の土を平にして、参加家族同士が協力し合いマルチを張りました。種まきは、1家族50粒ほどを、2条植え株間0.3mのマルチの穴に1粒ずつ、種子を横にして3cm位の深さに押し込み軽く覆土しました。また、種まき後に鳥害対策として、釣り糸を高さ2m位に数本張りました。

種まきから約1週間後出芽し、本葉が次々と展開しました。6月になると落花生の根元や畝間に雑草が目立つようになりました。熱心な家族は定期的に草取りに見えましたが、センター職員が代わりに除草をした畝も何畝か

ありました。

7月上旬には開花が始まったので、マルチを取り外し中耕、追肥を行いました。発育途中



にマルチを剥がす理由は、ラッカセイは開花後5～7日すると、花と茎の間から、子房柄と呼ば

れる根のような物が下に向かって伸びだし土中に侵入し、先端に莢(さや)ができ、莢の中に豆が形成されます。その子房柄が土中に潜るのを邪魔しないようにするため、マルチを剥がします。その後、気温の上昇とともに繁茂しだし、次々と花が咲き株も大きくなり、順調に生長しました。

収穫は7家族全員が集合し、10月10日に行



いました。未熟な莢もありましたが、まずまずの出来で、歓声があがっていました。

収穫後は、センターで別に栽培したラッカセイの、ゆで落花生を試食して頂きました。

栽培体験は、センターの初試みでしたが、非常に好評でした。今年も実施したいと思しますので、ご参加お待ちしております。



文：Y. T.

参考：「最新園芸大辞典」誠文堂新光社など

夷隅の信仰・風俗・祭り・伝統など（9）～いすみ鉄道の今昔～

鉄道敷設の遅れた夷隅地方でも、明治29年秋に蘇我～大網を開通させた房総鉄道会社の路線が、30年大網～一宮間、32年一宮～大原間も開通し、この地方にも近代的交通機関が着実に発達していた。が、夷隅の内陸部に鉄道が開通するのはしばらくの後であった。

乗合馬車

明治時代、人力車と共に有力な交通手段であった乗合馬車は「テート馬車」の愛称で親しまれた。乗合馬車が大多喜～大原間を最初に運行されたのは40年であった。

人車軌道

その後、千葉県が建設し運営した唯一の人車軌道となり、大正元年12月に全線開通し、10年夷隅軌道に譲渡されるまで続いた。



人車(国吉駅展示)

「人が車両を押す人車」という珍しい鉄道であった。この鉄道は明治43年、大多喜町有志による軽便鉄道建設運動として起こったので、とき

の知事から内諾を受けていたが、知事が交代すると、軽便鉄道の敷設は費用がかかり過ぎるとして、人車軌道に変更となった。営業を開始した人車軌道は、大原～大多喜間16キロメートルを2時間半で走り、約1時間毎に8往復し、停車場4、停留所3、待避所2が設けられた。このユニークな人車は、8人乗り客車で押し夫2人、貨車の場合は1人で押し、勾配のきつい森宮、行川、七曲の3ヶ所には信号手を常駐させ、前車軸に掛けた縄を引いて押し夫が押すのを助けたという。この人車軌道は、歩くよりも遅い交通機関ということで利用者も少なく、営業的には赤字続きであった。千葉県にとっても財政負担となり県営人車軌道は大正10年、夷隅軌道株式会社へ30,000円で払い下げられた。

気動車

夷隅軌道は大正11年3月、人力からガソリンへの動力変更を行い、気動車3両となって、12年2月からは大原～大多喜間を60分で1日6往復の気動車みの運転が行われた。14年には6万146人の乗客と896トンの貨物を

運び、23,775円の収入を上げ、営業成績も好転の兆しを見せ始めた。ところが、この頃、大原～大多喜間に乗合バスが運行され始めたことに加えて、鉄道省による鉄道敷設計画として木更津～大多喜～大原ルートをも木原線として着工することが決定されたため、その存立基盤を失うこととなった。昭和2年夷隅軌道は8万5千円で買収され、2年8月を持って営業を停止した。こうして我が国気動車の先駆というべき夷隅軌道は木原線に引き継がれてその使命を終えた。

木原線

夷隅軌道の廃業翌日、昭和2年9月1日から開始された木原線工事は、総工費1,433,272円を投じ、2年半の歳月を費やして、5年4月1日大原～大多喜間の15.9キロメートルが開通した。木原線には、大原、上総東、国吉、



大多喜駅ホーム

上総中川、大多喜の各駅が設けられ、客貨混合列車が走り、所要時間は35分に短縮され、輸送量、営業収入など営業成績も夷隅軌道時代に比べ数倍に増加した。その後、昭和9年8月に、上総中野までの26.8キロメートルが全線開通した。上総中野駅では小湊鉄道と接続し、房総西線(内房線)の五井(市原市)に結ばれている。当初は久留里線と接続し、木更津から大原まで房総半島を横断する計画であったことから「木原線」と名付けられた。この計画については、大多喜を始めとする関係町村による接続促進運動



新田野駅・(無人駅)

が40年代まで続けられが、社会情勢の変化により実現には至らなかった。

木原線は開通以来、沿線住民の唯一の足として、また、米や木材、薪炭など貨物輸送にも大きな役割を果たした。通勤、通学客や出兵兵士を見送る人々、戦火を逃れて疎開してきた人やその荷物の往来で賑わい、秋の収穫期には、高品

質で市場価値の高い「国吉米」の集荷・発送基地として、国吉駅は活気づいていた。開業当初は、客車と貨物車を連結した蒸気機関車が、大原～大多喜間を1日8往復し、たいてい満員の状態で、特に朝夕の混雑はひどく、あふれた乗客は貨車にも乗車したという。終戦後は深刻な燃料不足のため、22年1月には全線の通学定期券の使用を一時中止し、24年から一時期には、周辺で産出する天然ガスが燃料として使用された。

30年代半ばまで、乗客数は堅調に推移していたが、営業距離も短く収入が少ないうえ、定期券利用者の占める割合が大きく、営業経費も年々増加する状況で、県内一の赤字路線となっていた。

29年ディーゼルカーとレールバスを導入。30年代以降は駅の無人化や、駅舎・貨物庫の撤去、貨物列車運行の隔日化などの合理化を図る一方、地元負担で新たに4つの無人駅西大原、新田野、小谷松、久我原を設置し、朝夕には千葉行きの直通列車を運行するなどして旅客数の増加に努めた。44年貨物列車も廃止となった。沿線人口の減少や、タクシーやバス、自家用自動車の普及により経営はさらに悪化した。

56年9月、木原線は国鉄の経営再建の一環として廃止の対象となった。沿線の夷隅町、大多喜町では廃止反対の運動が展開され木原線の存続を訴えた。しかし、国鉄の分割民営化の動向もあり、61年第三セクター式による鉄道としての存続が承認された。63年3月23日の「さよなら運転」をもってJR木原線は廃止となり、翌24日から、いすみ鉄道として再出発することとなった。

いすみ鉄道



いすみ350形

61年11月11日、木原線運行対策準備会が発足し、関係自治体及び民間の出資による会社の設立の準備が進め

られた。路線名を公募により決定し、列車の増発を図

るため大原駅に専用ホームを新設、経費節減のため13駅すべてを無人化し、車両はワンマン運転の可能な軽量ディーゼルカー7両を新

規に導入することとなった。車体の色は、千葉県の花、なの花の色の黄色と山の緑をもとにデザインされた。なの花号（千葉県）、あじさい号（勝浦市）、さくら号（大多喜町）、くろまつ号（夷隅町）、きょうちくとう号（御宿町）、つばき号（大原町）うめ号（岬町）と、それぞれの町の花・木のシンボルマークを取り付けることとなった。



国吉駅乗降状況

62年7月7日、いすみ鉄道株式会社設立、63年3月24日、JR木原線廃止、同日いすみ鉄道の営業が開始された。以来、バス路線も次々と廃止となる中で、沿線住民に残された



大原駅ホーム

数少ない通勤、通学の足として、また夷隅地域の活性化の一助として経営努力を続けてきたが、旅客数は年々減少、開

業以来、慢性的な赤字が続き存続の危機に瀕し、平成19年10月のいすみ鉄道再生会議で、21年度までの2年間は収支検証期間として存続し、21年度の決算で収支の改善が見込めない場合は廃止を前提に代替交通を検討することとなったが、経営改善策、乗客獲得策を打ち出し、その結果、経営状態の回復が認められたため、22年8月に存続が決定された。

現在でも予断を許さないものの、積極的に魅力的な向上へ取り組み、沿線とタイアップした様々なイベントの創出や、JR西日本からキハ52形、キハ28形という国鉄時代のディーゼルカーを導入し、観光急行や快速列車を運行し、観光の目玉とするなど、様々な価値創造に取り組んでいる。25年10月には、NHKBSプレミアムで吹石一恵主演のテレビドラマ「菜の花ラインにのりかえて」の舞台となった。春には、菜の花や桜が咲き沿線のスポットには多くのカメラマンが訪れている。

文：M. O.

参考：夷隅町史（平成16年）

農機具今昔物語 その十三

時代の移り変わりに伴って、昔の農機具と今日の農機具とを、比較すると想像もできないほどの進歩がみられます。明治、大正時代の農具は人力、または畜力を利用した農機具だけでした。当センターには地元の方から寄贈された、貴重な人力等による昔の農具が展示されています。今回は昔使われた農具について紹介します。

●種まき器（麦用種まき器）

さとのかぜ No. 184 号に掲載したところですが、当センターの畑にて初めて 11 月下旬麦の



種まき器を使い、小麦、大麦の種をまきました。2 条まきで畝幅はおよそ 15cm です（種の落ちる位置を 1cm ほど左右に移動することもでき、落ちる量も調節できます）。また一部分は従来と同じ手でまきました。手押しの種まき器とはいえ、作業効率はいうまでもありませんが、手でまくとの違い播種の量が一定になりました。手まきは種の量が多くなりどうしても厚まきとなってしまう傾向にあります。発芽から最初の頃は芽が沢山出て青々としていて生長が期待できる感じですが、だんだん風の通りも悪くなり収穫が近づくころになると雨風等による倒伏するリスクが高くなり、その結果収穫等にも影響します（その他の要因として肥料の量も関係します）。種まき器を使用し薄くまいた場合は



風に通りも良く、加えて刈取りも容易にできて充実した実が期待できます。種まき器がその当時に麦まきに必要不可欠であったかがわかります。60 年以上前に当地域で実際に使われていた麦の種まき器が修理することなく、今年現役復帰、使用できたことは、いかに保存状態等が良かったとはいえ、ただただ驚きです（感嘆）。これから食料事情が変わり、麦

の栽培が盛んになればもしかしたら種まき器の出番があるかもしれませんね。

●土入れ器



土入れ器を使つての覆土作業



土入れ器

畝の間の土を株の中に振るい込むときに使うものです。この土入れ器は、重さが 1.7 kg と軽く、土を入れて 3~4 kg 程です。土が落ちる穴の大きさは柄（奥）に近い方が若干ですが広く土を入れる先端側の方が狭くなっている構造です。網の大きさは直径 2.5~3 cm ほどです。麦の栽培には欠くことのできない農具です。種を播種した後の覆土をする場合にも使用します。耕運して軟らかくなっている圃場に力強く勢いをつけて土が入る先端部分を差し込み、土を目いっぱい入れて持っている棒状の柄を目的の種等の上で前後に振るい、砂が均等に落ちるように心がけて進みます。覆土の量も調整することもできます。また、発芽して間もないころ風雨等により土が飛散した時や、霜が降り霜柱が立ち麦も土ごと浮き上がり不安定になる頃、麦踏を行いあわせて土入れ器で土入れも行います。この作業工程は当時の真冬の風物詩でしたが今ではほとんど見ることはありません。センターで麦を栽培してから、今年始めてこの土入れ器を使ってみたところ、特別に不具合もなくスムーズに効率よく作業ができました。改めて昔の道具は使いやすくうまくできていることが強く感じとれました。手製の人力による農具は、故障も少なく長期間使用できるものです。

文：T. S.

いすみのコウノトリ

1. コウノトリはこんな鳥

コウノトリは翼を広げると 2m 以上もある大きな鳥で、昔から瑞鳥(ずいちょう: めでたいことが起こる前兆とされる鳥)とされてきました。ヨーロッパのコウノトリ(シュバシコウ)が、赤ちゃんを運んでくるといふ言い伝えも有名です。

昔は、日本中に普通に生息していたのですが、明治時代になりだれでも自由に銃猟ができるようになると、コウノトリやツル、トキ、ガンなどの撃ちやすい大きな鳥から手あたり次第に撃たれ、たちまち絶滅に追い込まれました。現在、コウノトリは兵庫県の豊岡市で放鳥した個体が繁殖していますし、トキは佐渡で飼育・放鳥しています。

水辺の生態系の頂点に立ち、水辺の小動物をたくさん食べるコウノトリが住める環境は、人にとっても安心・安全な自然環境と言えるのです。

2. 「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」について

野田市でコウノトリを放鳥したというニュースを聞いたことでしょうか。コウノトリやトキの野生復帰を通して、地域の安心な環境の再生と地域経済の活性化をめざして、4 県 29 市町村が加盟し「コウノトリ・トキの舞う関東自治体フォーラム」が組織されています。いすみ市の太田市長さんは監事を務めています。コウノトリはどこに飛んで行くかわかりませんので、広い地域で連携して、コ



兵庫県豊岡市「コウノトリの郷公園」

ウノトリが住める豊かな自然環境を保全・再生していこうというもので、野田市が先陣を切って今年の夏に放鳥を開始したところです。

3. いすみ市のコウノトリの地名

いすみ市周辺には、昔、コウノトリがたくさん住んでいたことが、小字(こあざ)の分布から推測できます。小字とは、字(あざ)のさらに細かいもので、秀吉の太閤検地の時に制度化され、一筆ごとの土地の集合体に小字名がつけられ、江戸時代の状況が反映されていると考えられます。普通の地図には小字は出ていませんので、税務課で見せてもらいました。

すると、小字に「鶴」やコウノトリを表す「鴻」を使った

市町名	(面積 k m ²)	鴻の字	鶴の字
御宿町	(25)	1 地区	4 地区
勝浦市	(94)	0 地区	17 地区
大多喜町	(130)	2 地区	5 地区
睦沢町	(36)	0 地区	3 地区
一宮町	(23)	0 地区	0 地区
いすみ市	(158)	8 地区	20 地区

地名がたくさん見つかりました。特にいすみ市には、鴻と鶴の字のつく小字が多いことに気づきます。

なお、「松に鶴」というたどえがありますが、ツルは木にとまれず、松に巣をつくるのはコウノトリです。昔はツルとコウノトリを混同していました。コウノトリは、水田を見下ろす大木の一番上に巣をつくるので、縁起がいいこともあり、目立って地名にされたのでしょう。

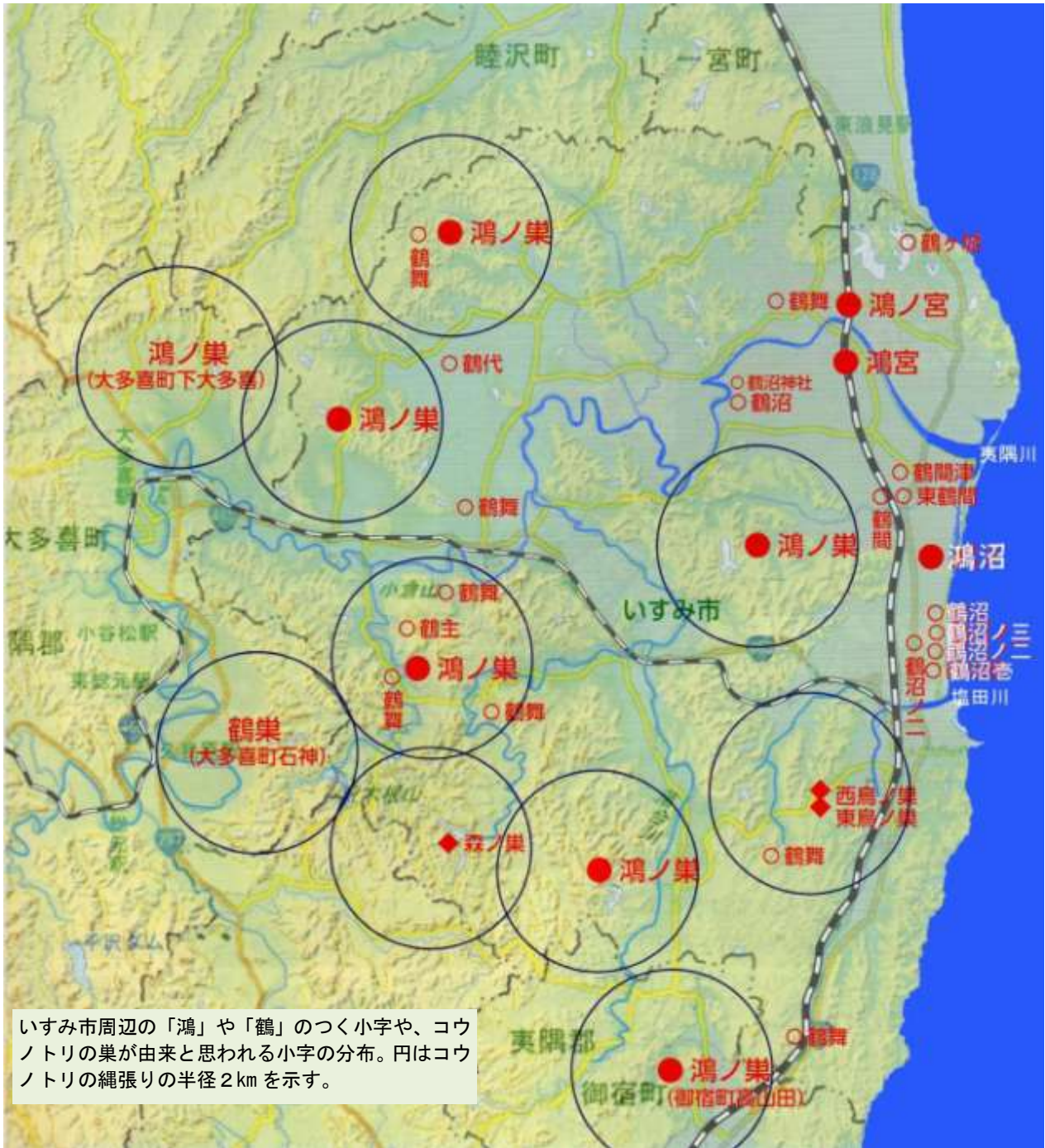
「鴻の巣」は、海岸から少し離れた丘陵部に、実際のテリトリーである半径 2km の間隔をとって分布しており、この場所に実際に巣があったと考えるとつじつまが合います。

「鴻沼」「鴻宮」や、「鶴沼」「鶴ヶ城」という地名は、夷隅川河口周辺に集中しています。河口周辺は当時広大な湿地で、コウノトリやツルの集まる採餌場だったことが容易に推測

されます。

4. いすみに飛来したコウノトリ

1900年以降で、千葉県へのコウノトリの飛来記録は、私の調査ではわずか8件しかありません。1962～63年の冬に御宿町～勝浦市で1羽が越冬(鈴木藤蔵氏確認)。最近では、2014年3月6日に多古町に1羽が飛来し、同じ個体が愛



知県や長野県を経て4月22日にいすみ市に飛来しました。(右の写真) また、2015年11月19日には、野田市で放鳥した個体が、勝浦市植野に顔を見せました。



いすみ市に飛来したコウノトリ

コウノトリが定住するには、昔、夷隅川河口周辺に広がっていた

湿地のような、小動物がたくさんいる水辺が必要です。いすみ市で始まっている無農薬の米づくりも生物多様性の再生に貢献するでしょう。いつか、コウノトリがいすみ地域に定着し普通に子育てする時代が来ることを願っています。

文: 布留川 毅

参考文献など

- 「小字名から見た千葉県いすみ市のコウノトリの生息」千葉生物誌(2015)63巻2号 布留川 毅
- 「いすみ生物多様性戦略」2015. いすみ市農林水産課・生物多様性いすみ戦略策定検討委員会

南房総の「食」について(3)～タコ～

新年を祝うこの季節、家庭の食卓をにぎわす料理の代表が「おせち料理」だ。おせち料理の食材は地方によって異なるが、いすみ市ではタコの存在が欠かせない。私は生まれも育ちもいすみ市大原だが、物心ついた時には、おせち料理には必ずタコの存在があった。

今回はそんな思い出も抱きながらタコ漁も行っている、大原の漁師にいすみ市ならではの美味しいタコのゆで方をうかがった。大原で捕れる地ダコ、種類はさまざまだが、主にマダコを地ダコと呼んでいる。漁師は、大原沖でタコツボを仕掛け、7日から10日後にタコツボを船に上げる、上がったタコは、船上ですぐに冷凍される。とれたてをすぐに冷凍



ヌメリを取る

すると、タコが柔らかくなるという。ゆで始める時はまず解凍し、内臓を取り除き、塩を揉みこんでヌメリを取ってゆく。かなりヌメリがあるが、この方が新鮮だと言う。足の根元が一番ヌメリが多い。塩をつけてヌメリを取ろうとしても、なかなか取れず。水を何回も換えてすすぐが、すぐに泡立ってしまう。

ある程度ヌメリが取れたら、今度はゆでるのだが、水は必ず井戸水を使う。また、家庭用のガスを使うと火力が弱いので、火力の強いかまどでゆでるのがポイント。燃料はモウソウチク。竹の方が薪よりも火力があるのでタコのおいしさが十分出ると言う。ゆでる時、大根の切れ端を入れておくと柔らかくなるそう。大根と相性がよいのだと言う。



タコの足先だけゆでる

かなりヌメリがあるが、この方が新鮮だと言う。足の根元が一番ヌメリが多い。塩をつけてヌメリを取ろうとしても、なかなか取れず。水を何回も換えてすすぐが、すぐに泡立ってしまう。



竹で火を起こしたかまど

塩分濃度計を使って、3～4%に調整した塩水を使う。アルカリ性の水でゆでた方がうまくなると言う。このゆで方をする漁師は、今では数えるぐら

いしかいない。ゆで始めは、かまどの火力を上げる。水が勢いよく煮立ってきたら一気に入れずに、足先を熱湯につけ、足先が丸まるようにゆでていく。足が丸まっていると見栄えがよいそう。5～6



足先が丸まってきた



ゆであがったタコ

回ほどタコを熱湯の上で上下させ足先だけゆでる。足先が、見ばえよく丸まってきたら、全体を熱湯に投入する。小ぶりのタコは3分程、大きいと12～13分程ゆでる。ゆであがったらすぐ井戸水で冷やす。冷やすことで身がしまりおいしさが増すと言う。ゆであがりのタコをすぐ食べるよりは、冷めてからのほうがおいしい。

試食させていただいたが、塩分もほど良く、弾力もあった。足の部分はスライスして刺身のように食べるのはもちろんおいしいのだが、頭の部分は里芋と煮るのもおいし



タコの刺身



タコとリンゴを酢で和えた料理

い。サラダオイルやオリーブオイルを使ってカルパッチョにしてもおいしい。今回はタコの刺身を醤油のみと、醤油とオリーブオイルを混ぜたものでいただ

いた。噛めば噛むほど甘味が増してくる。さらにリンゴとタコに酢を和えた料理もいただいた。リンゴとタコがこんなに合うとは驚きだ。タコにはタウリンが多く含まれ、滋養強壮にもよい。タコ漁の入漁期は12月初めから3月末。海外から輸入されてくるタコも多いが、いすみの地ダコは弾力性があり甘味もある。地元の漁師のためにも、ぜひ皆さんも旬を食していただきたい。

取材協力 中村 享 氏

文：E. N.

《 行事報告 》

10月3日

草木染体験



大人7名、子ども3名、計10名の参加がありました。使用した染材は、昆虫広場で採集したセイタカアワダチソウの花穂と、センターで栽培した赤ジソの葉、サクラは剪定枝をチップにして風乾燥させたものです。花穂は細かく刻み使いました。材料は水から2~4時間ほど煮ました。

使った布は、シルクのストールと木綿の手ぬぐいです。各自ビー玉や輪ゴムを使って絞り模様を作ったり、墨汁で模様をつけたりしました。サクラは木綿にはとても薄い色の染め上がりでした。液に浸す時間や柄の作り方によってさまざまなオリジナル作品に仕上がっていました。

10月10日

落花生の栽培体験



7家族、計14名の参加がありました。5月10日に種を植付ける体験を行ってから、途中雑草取りに何度も通って来られた方もおられました。5ヶ月後に待望の収穫です。株を引っっこ抜き、根っこについているラッカセイのさやをもぎとって「千葉半立」の収穫です。そのあとは、畑土に残されたさやも取り残しがないように探して集めました。植え付けから生長過程、黄色い花、花が地面に入って生長することが観察・体験でき、収穫もでき、その上ゆでラッカセイの試食もできたと大好評でした。

10月24日、25日、31日、11月1日

竹かご教室 入門編



計4日間の連続講座で、今年も竹かご教室(入門)を開催いたしました。延べ大人69名の参加がありました。

本講座はもともと、竹ひごを作ったこともない未経験者が対象です。最初の2日間はそんな人のために時間をかけてひご作りに慣れてもらいます。残り2日で六つ目かごとかいかだ底のかごづくりに挑戦です。ひご作りの要領がわかれば2日目から竹を編み始めるビギナーさんもいらっしゃいました。最終日には皆さん、自作のかごをお土産に持って帰りました。

また、来年も開催予定です。チャレンジしませんか？

11月14日~23日

第19回さとの文化祭



文化祭には、夷隅郡市の小学校22校から出展があり、絵画、工作、自由研究など計469点の作品を展示、一般の部では、いすみ楊枝倶楽部、岬町俳画クラブ、市内の陶芸家や消しゴムスタンプアーティストなどの作品も合わせて展示しました。延べ976人の来場者がありました。

家族連れで来館される方が多く、文化祭を通じて初めて当施設の存在を知ったと言う方も見られました。来年も開催予定です。ぜひ見に来てくださいね。

11月28日、29日

竹かご教室 応用編



2日間の連続講座で、参加者は延べ22人でした。応用編は竹ひごをサクサクできる人が対象です。講座は菊底のかご作りです。菊底のかごは、米を研いだり、ぬか床の水取りなどに使う、目が詰まったかごです。中には長い竹ひごを作れるようになったので背負いかごにチャレンジして完成できたという参加者もいました。

やはり応用編に参加される方は手際がいいですね。定員が10人と少ないのですが、その分、つまずいたところはしっかり聞けますので、この講座もぜひ挑戦してみてください。

12月5日

つるでリースを作ろう



大人15名、こども1名、計16名の参加がありました。使う植物の説明と必要以上に取らないとの注意の後、高枝ばさみ、剪定ばさみをもってセンター周辺の山裾に材料採取に出かけました。土台はクズ、テイカカズラを、装飾には緑色の葉、マンリョウ、クロガネモチ、アオキ、マユミ、ムラサキシキブ、カラスウリなどの実を使いました。他にトウガラシ、松ぼっくり、リボンなども使いました。植物を覚えながら採取したものを利用していろいろな作品を作ることができて楽しかったと大好評でした。

12月12日

米作り3・もちつきをしよう



大人24名、こども20名、計44名の参加がありました。今年は電気柵設置の効果で、田んぼへのイノシシの侵入を防ぐことができ、もち米を無事収穫できました。

蒸しあがったもち米を臼に移し、まずは数人で米を潰します。その後がもちをつく作業です。米は38升(58kg)あり1回2升(3kg)ずつ、計22臼つきました。

ついたお餅は、お土産用の丸餅、のし餅と昼食用に加工しました。昼食は、きなこ、あんこ、センターで収穫した大根を使ったからみ餅でした。もちつきは楽しいし、美味しいと、参加者皆さんに満足いただけたようです。

12月19日

米作り4・おかざりを作ろうA



大人16名の参加がありました。今回のおかざりは、夷隅地方の農家などで伝統的に作られている鳥居形のもので、前垂れの12本は、十二支や12カ月からきているといわれています。材料のわらは、キョウシンという丈の長い品種です。横方向の芯は50本、前垂れは20×12で240本、計290本のわらを使います。飾る扉の大きさに合わせて小さめに作るものは、40+180本の計220本のわらを使って作りました。

正月を前に伝統的な日本文化にふれることができた、実用的なものを作れた、とても楽しかったなど、みなさんからうれしい感想をいただきました。

12月22日

米作り5・わらでリースを作ろう



センターでは初の試み。ワラでリース作りです。ツルでリースやカゴを作りますが、資源不足。そこで里山的にはワラだろう、といことで早速実施しました。ツルで作るより材料の入手は楽そうです。なんといっても扱いやすさではこちらが上ですね。

ツルだとどうしても大きくなってしまいましたが、お手ごろ感のある大きさに完成しました。ただ・鍋敷きへの流用はちょっと難しそうでした。

12月23日

米作り6・おかざりを作ろうB



センターでは人気のある講座の一つです。今年もキャンセル待ちが多く出てしまいました。こちらはワラを210本使用します。ワラをねじりながら注連縄を作り、そこに三つ編みにしたワラ束を差し込みます。鳥居型のお飾りとは違う、どちらかと言えばおなじみの形ですが、作るのは格段に難しい。数年前から定員を減らし、指導者も複数配置して確実に持ち帰りできるように指導する、そんな年末最後の講座です。

☆行事内容やセンターの日常を、センター日誌 (<http://isumisato.exblog.jp/>) にてご覧いただけます。

これからの行事案内

1月

●米作り7・わらづと納豆を作ろう

10日(土)9:30~12:30 定員20名

有機大豆でわらづと納豆を作ってみませんか？

参加対象:中学生以上 ▲参加費:500円

持ち物:植木バサミ、タオル大、座布団、使い捨てカイロ

●ススキでミニほうきを作ろう

23日(土)10:00~12:00 定員20名 雨天中止

ススキやオギの枯穂を使ってミニほうきを作しましょう。

場所:センター ▲参加費:200円

持ち物:剪定バサミ、軍手、作業できる寒くない服装

●里山の鳥の観察

30日(日)8:30~11:30 定員20名 雨天順延31日

里山にはどんな鳥がいるでしょう？観察に行きましょう。

場所:センター周辺

持ち物:寒くない服装、観察用具(あれば)

2月

●冬の星座観察

6日(土)17:30~19:00 定員20名 雨天プログラムあり

オリオン座など冬の夜空の星座観察をしましょう！

持ち物:寒くない服装

2月

●水辺の鳥の観察

11日(木)8:30~11:30 定員20名 雨天中止

水辺にはどんな鳥がいるでしょう？観察に行きましょう。

場所:夷隅川河口周辺(集合はセンター)

持ち物:寒くない服装、観察用具(あれば)

●そば打ち体験

20日(土)10:00~14:00 定員18名 (現地集合)

そばを自分で打って皆で味わいましょう。

参加対象:中学生以上 ▲参加費:1000円

持ち物:ボウル(約30cm)、割烹着、

三角巾、タオル、持帰り容器

3月

(1月5日から受付開始)

●トウキョウサンショウウオの卵のうを見つけよう

6日(日)10:00~12:00 定員20名 小雨決行

センター周辺のトウキョウサンショウウオの卵のうを探し観察します。※卵のう、成体の採捕はできません。

持ち物:長靴、雨具、汚れても良い寒くない服装

●花炭を作ろう

21日(月)9:30~12:30 定員20名 雨天中止

いろいろなものを使って「花炭焼き」に挑戦しましょう。

持ち物:花炭材料(マツボックリなど)、軍手、ふた付空缶

参加対象:中学生以上 ▲参加費:300円

センターの生き物たち



ノササゲ/マメ科

やぶかげに生えるつる性の多年草です。冬に青紫色の熟した実が、さやからはじけている姿が林道沿いの林縁で目立ちます。葉は3出複葉の互生で、小葉は薄く、裏面が白色です。つるは左巻きにからみます。8月から9月ころ淡黄色の蝶形花を咲かせます。食用の豆、ササゲと似ていますが、野にあって食べられないのでその名がついたといわれます。ガマズミ、ノイバラ、マンリョウ、ナンテンなど赤い実が多い12月冬の林縁で、その青紫色が際立っていました。



チャミノガ/ミノガ科

ミノムシでおなじみのミノガの仲間の幼虫は、葉や枯枝で巣を作ります。雨具のミノに似ていることからそう呼ばれて日本産で21種が知られています。ミノの中でさなぎになり、オスの成虫はミノガ科の蛾になりますが、ほとんどのメスは羽を持たず足まで退化してミノの中から出ずに卵を産んで一生を終えるものもいます。チャミノガのミノは枝に直接つき、オオミノガは40~50mmと大きくて柄があります。夏にバラ科、カキノキ科などの葉に食害を与えます。外来のオオミノガヤドリバエに寄生され(食べた葉についた卵が体内で孵化)、最近激減しています。

いすみ楊枝 —千葉県伝統工芸品—

センターでは、「いすみ楊枝」を県内外に広く紹介するため、毎月高木守人氏に実演をお願いしています。

日時 毎月第3日曜日(9:30~16:00)

場所 ネイチャーセンター

講師 高木守人氏

参加料 材料費など実費いただきます

内容 楊枝・花入れ・茶杓作り など

編集後記

あけましておめでとうございます。当センターは1月4日で開園21年を迎えました。あらためて関係各位に感謝申し上げます。

正月の飾りや遊び、おせち料理には、無病息災などの願いも込められています。おせちを食べながらそれぞれの意味を教えられた子供も多いのでは。広い意味で親心にふれると、心温まりますね。私は、黒豆、レンコン、ゴボウなどを少し多めに食べておきました。

今年の正月はたいへん暖かく、初詣も厚着不要でした。房総の山に分け入れれば、早春に咲くコショウノキ、オニシバリが咲き出していて、素敵な花と共に良い香りで楽しませてくれました。しかし、暖冬では寒暖差が激しく体調も崩しやすいかと。ご自愛ください。 所長

行事への参加申し込み、お問い合わせは、電話(0470-86-5251)、ファックス(0470-86-5252)、または、直接センター事務室にお申し出下さい。定員のあるものについては、定員になり次第締め切らせていただきます。あらかじめご了承下さい。全ての行事はネイチャーセンターに一度集合してから移動します。

*eメール可(メールアドレス:senta-sato@isumi-sato.com(すべて半角小文字です))

*行事申し込み後、都合によりキャンセルする場合は必ず早めにセンターまでご連絡下さい。

◆ ◆ ◆ 利用案内 ◆ ◆ ◆

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、12月29日~翌年1月3日

開館時間：9:00~16:30、入館料：無料

※当施設のご案内や解説などを希望される団体は、2週間前までにお申し込み下さい。